

### 教科・日本語のチームティーチングの取り組み

筒井美貴 (兵庫県立芦屋国際中等教育学校)

丸山多賀子 (兵庫県立芦屋国際中等教育学校)

元村尚美 (兵庫県立芦屋国際中等教育学校)

本校は、公立の中高一貫校である。中学一・二年では母学級を持つが、日本語指導が必要な生徒のために少人数クラスがある。国語だけでなく、数学・理科・社会でも少人数クラスが設けられており、通訳や日本語教師がTTとして入っている。授業内でのサポートだけでなく、学習内容の習得、学習語彙の定着などを視野に入れると、日本語教師としてどのようなサポートをすべきなのかを試行錯誤してきた。ここでは、理科と社会での実践を報告する。

背景と動機を述べる。日本語教師が教科内容に踏み込むことはできず、長い間、漢字への支援を続けてきた。既習教科の単語をリストにし漢字テストをしていた。しかし、授業や定期考査にはなかなか反映されなかった。そこで定期考査の結果に結びつけることを目標とし、教科担当教師とどのように連携をとっていくのかを教科別に考えた。生徒にとって、定期考査で点数を獲ることは学習意欲を高める大きな要素となるからである。

理科では、「問題量」と「繰り返し」を意識した。教科の小テストだけでなく、日本語クラスでも漢字プリントに小テストと同じ問題を加え、繰り返し学習させた。フィードバックは教科の授業の中で行い、漢字学習と教科学習とのつながりを生徒にも意識させた。社会では、「問題の質」と「文での記述」を意識した。日本語担当は教科語彙の穴埋め問題を作成し、教科担当教師は説明や理由を問う記述問題を作成した。作文することで単語から共起すべき語彙や学習語へとつながりを意識させることができる。これらの実践は、生徒に「定期考査につながるものである」という実感を持たせることはできた。しかし、教科担当教師の授業スタイルや定期考査の形式、日本語教師との関係などから、サポートの目標、持続性などは異なる。しかし、教科学習において日本語支援は不可欠であり、それには教科と日本語との目的の共有という双方向のコミュニケーションが必要である。